
『友情』についての考察

金魚さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『友情』についての考察

【Zコード】

Z5718C

【作者名】

金魚さん

【あらすじ】

『友情』。なんと優しく、美しいものだろう。人はそれに、希望と絶望を見出す。多かれ少なかれ。なんにせよ、それはしつかり見据えるべきものだ。…友達とは、なんなのだろ？？

1頁目 副題「始まり」（前書き）

ローゼンメイデンの一次創作です。

しかも、某掲示板に投稿済みの。

おいおい、人名変えて少し書き足した、通常版？も投稿するつもりです。

念のためいつておきますと、ここではローゼンメイデンたちは人形ではなく、人間です。

ご了承ください。

又、ベジータも出てきますが、それは仕様です。

ご了承ください。

1頁目 副題「始まり」

疑い。それは『絆』を絶つ物。

今まで何も考えずに付き合っていた、親しい友人たち。何を考えているのか、どう思っているのか、気になりだす。それと同時に、何も打ち明けられなくなつていく…

「どうしたのー？蒼星石ー？最近何かおかしいのよー？」

「なんでもないんだ」

「大丈夫？巴に相談してみるの？」

「平気だよ」

そうとも。平気だよ。友人だと思っていた、真紅。ただ、それが僕の思い込みだつただけじゃないか。

きっと、人はこうして『成長』するんだ。いい意味でも、悪い意味でも。

いいや、いい意味ではないか。決して。

誰しもが経験するんだろう。おそらくは。だから、平気だよ。

「ありがとう、雛苺」

ああ、嫌だ。彼女まで疑い始めている。彼女も『友達』じゃないんじやないかつて。

昨日まではなにも気にならなかつたのに。嫌だ嫌だ嫌だ。

大丈夫、きっと彼女は『友達』。大丈夫、大丈夫、大丈夫。

「やつぱり顔色、悪いのよー？」

「うん、家に帰つたらゆつくり寝るよ

「それがいいのよ。そしたらたぶん明日は元気いっぱいなのー！」

「ありがとう、雛苺」

「どういたしましてなの！」

ああ、きっと、一週間前の僕なら。

彼女に洗いざらい打ち明けていたんだろうな。

疑いたくないけど。僕は『疑う』ということを知ってしまったんだ。なにもかもが嘘に見えてくる。

これが、『成長』か。嫌なものだな。

五日前。高校に入つてできた『友人』真紅。

彼女はとても優雅で、何事にも動じない。そんな人だつた。

僕は、彼女と、友情を培つていた。つもりだつた。

「ねえ、真紅。今度映画でも見に行かない? 雛莓と、翠星石も誘つて。」

雛莓 僕の、小学校からの友人でまさに『親友』。幼馴染に巴さんとものすごく仲がいい。

巴さんはいい人なんだけど、部活動とかの関係であんまり会わない。でも、そこそこ仲がいい。

今回映画に誘う人に、名前が上がらなかつたのは、やはり、部活の関係だ。とてもいい人なんだけど。

雛莓自身は、いつも明るく、純真無垢のようで時々ものすごく黒い! 鈍いようで鋭く、鋭いようで鈍い。小学校3年生ぐらいから、あんまり成長していないような気もするな。

翠星石 僕の双子の姉。実は、本当は僕と翠星石どっちが姉かわからなくて、一応僕が姉ということになつてたんだ。

けれど、小学校に上がるとき翠星石がオネエちゃんがいいですう! つていつて引かないもんと、僕が妹つてことになつたんだ。なんか納得いかないけど。翠星石は、人見知りが激しい。そのせいと、よく知らない人には可憐な乙女としかうつらない。

けれど、親しくなつた人には横柄だ。とても。非常に。けれど、人

を気遣う心も人一倍なので、一度友人になつたらとてもいい友人になる。

いざというときには頼りになるし、頼りがいもある。たとえ普段どんなに辛口でも。いや、舌が凶器じみていても。

本人は照れくささの裏返しなんだろ。実際、まともな言葉にしたらこそばゆすぎるようなことも、凶器でくるんだら案外喋れるものだ。

とにかく、本当はやさしい人だ。

「蒼星石、紅茶を入れなさい。」

「えつと、これでいいかな？」

僕はダージリンをいれて渡す。

「まあまあね。：それで、映画？内容はなんなの？」

「幸せの青い鳥 その名は史上最悪の獵奇連續殺人犯千人殺しの人食いジャック。ラブロマンスだよ。」

「なんなのそのものすごい名前は。」

「獵奇殺人犯と看守の禁断の愛を描いた映画だよ。すごく泣けるらしいよ」

「私は行かないわよ。そんなの見たくもないわ」

「同時上映くんくんと兎紳士 禁断の恋職場編（R 18 指定）」

「ぜひ一緒にいかせてもらうわ！」

「そこなくつちゃ！」

そう。その二日後、僕らは楽しく映画を見に行つた。そう、僕は信じて疑わなかつた。

なにしろ、僕の知つてゐる『疑つ』は、あくまで推理小説や、サスペンス、梅岡に対してのものだつたから。

親しい『友人』を『疑う』。僕には思いもよらないことだつた。いや、少し違うか。『疑つ』ことは確かにあつた。しかし、どこか心の底では『信頼』していたのもまた事実。

僕が知らなかつたのは、『友人』を『信じない』『信じられない』

とこうことがありえるということだったのだろう。

たとえ、その日より少し前から、真紅の様子がどこかおかしい事は、体調が悪いんだろう。

程度にしか考えていなかつた。どれほど、真紅が『よそよそしく』なり始めていても。

あくまで僕の氣のせいだと、言い聞かせていたことに、自分自身気がついていなかつた。

だつて、真紅は僕の『友達』なんだから。

「翠星石！ 明後日の映画、真紅も来るつて！」

「ほつ！ よくあの赤い石像を引っ張り出せましたね。来るわけねえと思つてたですが」

翠星石の言つてることは確かにあたつてゐる。真紅は確かにとんでもない出不精だ。

けれど、それと同時に異常なくんくんマニアでもある。

前、クンクンのポスターとキスしているのを僕は見てしまつた…。

「雛莓もこれるつて？」

「チビチビも大丈夫だつて抜かしてたですう。ただ、巴はやつぱり部活でこれないらしいです。」

本当に、巴さんとは予定が会わない。いい人なだけに、余計残念だ。

「明後日が楽しみですう！」

「そうだね！」

本当に楽しみだつた。なにしろ、『友達』同士で遊びにいくのだ。

僕はあまり遊びなれていない。だからこそ、余計に楽しみだ。

『高校』は、まさしく『人生最良の時』。わずか三年、けれども、誰しもがあの頃はよかつたと口をそろえる。

そしてまた、あれも、これも、しておけばよかつた。あの時ためらわなければよかつた。断らなければ、もつと積極的に活動していた

ら、もつと遊べば、勉強すればよかつた。

とも口をそろえる。本を読んでも、テレビを見ても、誰一人高校時代は素晴らしい。といつてはいるのだ。

このことに、僕は中学3年生のときにそのことに気づいた。そして、高校に入るとき。

こう決心したんだ。

“何事にも誰よりも積極的に食いつく”

そうは言つても、現実には難しい。

僕はいつも思う。人生を高校時代をじやない それこそ気の済むまで何度もやり直したい。

今いる状況に満足していらないわけじゃない。ただ、あの時別の高校に入ついたら。将来つくであろう仕事。それもいくつもやってみたい。

大学の学部。片つ端から学んでみたい。そう、僕は心の底から思う。おっと、話がそれたね。つまり、『人生最良の時』に、『友達』と映画にいつたこともないなんて寂し過ぎるだろう?

それで、今回映画にみんなを誘つたわけ。何事にも積極的に。つてね。

そうとも。僕はこのとき、まだ『信じて』いたんだ。『うまくいかないことはあっても、『裏切られる』ことはないって。何故か。答えは単純。『友達』だから。

それが当たり前。そう『信じて』『疑わ』なかつた。

何もかもが思うどつりにいくなんて、馬鹿な『勘違い』をしていたわけじゃないんだ。

ただ、物事がうまくいかないことがあるのは、『僕自身』のせいか、『不可抗力』のせいだと思っていたんだ。

現に、僕はそれまで消極的だったからうまくいかないのは大半が『僕自身』のせいだったしね。

しかし、今の僕は違う。『消極的』だったから何も起きなかつたの

に、『積極的』になつたとたん牙を剥ぐものがあるなんて、僕は知らなかつたんだ。

三日前。

映画館の前に、僕たちはいた。大げさだけど、これから始まる映画への期待に胸を膨らませて。

「おそいですね、チビ苺たち。」

「僕らが早く来すぎたんだよ。」

「そうですかね？」

「そうだよ。ポップコーンでも買って待つていいよ！」

「はいですぅ」

楽しみで楽しみでしようがなかつた。『映画』。『友達』。考えるだけでわくわくする。

世の中には、映画なんか一人で見ても何十人で見てもかわらない。

『友達』と見に行くメリットがない。

感想なら次の日学校で話せばいい。なんて、そんなことを言う人もいる。

たしかに、理屈ではそのとうりだ。けれど、テレビ番組にしてもリアルタイムで見ると録画したのを見るのとでは何か違うだろう？ 映画も一緒だよ。あの大きなスクリーンで映画を見た後、友達ともしろかつたとか、喋るのって楽しいじゃないか。

「待たせたわね。」

「おつはよーなのー！」

「おせーですよ、チビチビに真紅ーさ、早くいくですー！」

「そうね。」

「はやくいくのーー！」

「うん、そろそろ始まっちゃうね。」

映画は面白かった。特に、ジャックの回想シーンが。雛苺と翠星石

は顔色が悪くなつてた氣もしたけど氣のせいかな？

くんくんは……うん。思い出したくもない。ジャンルはまさしく梅岡。真紅だけは大喜びで見ていたけど。

吐いてる人はたくさんいた。（「ゾジャックの時に吐いてる人もいたけど、あれはきっと興奮しすぎたんだろうね。

「おもしろかったね！とくにさ、ジャックが昔若い女人を生きたまま…」

「聞きたくないです！まったく、妹ながら趣味悪すぎます…」

「くんくんは素晴らしいわね！でも、ちょっと兎に嫉妬してしまうのだわ…。それにしても、あの遅い…」

「聞きたくないの！」

なんだか、翠星石と雛莓はげつそりしてゐ。きっと、長時間座りっぱなしだったから疲れたんだろう。

どうしようか。ナックにでも言つて少し休憩したほうがよさそうだな。

「ねえ、ナックにいかない？ちょっとお腹もすいたし」
そう。確かに、その時僕は『うかれて』いた。そりやそりやそうだろう。滅多にない、といつても、これからはしょっちゅうするつもりの、

『友達』と『遊んで』いたんだから。

「いい、です、ねえ…」

「そうするのだわ」

ナックに着いて、僕はビッグナック、真紅はくんくんバーガー、翠星石と雛莓は『コーヒー』を頼んだ。

「ねえ、二人は何か食べるものは頼まないの？」

「ちょっと遠慮するです。あー、何飲みましょうかねえ…

「カルピスにするのーー！」

「チビチビ、カルピスは白いですよ。くんくんの…」

「あー…。じゃあ、コーヒーにするの…」

「翠星石もそうするです」

『うかれ』過ぎていた。確かに。けれども、僕は『信じて』いたし、『気づいた』としても、何のことかわからなかつたろう。真紅が、『冷たい目』を僕に向けていることなんて。

「おいしかつたね。」の後びづする。『

「もう、時間も時間ですし、帰らねーですか？」

「そうするの……」

「じゃあ、帰ろうか。真紅もそれでいい？」

「ええ。でも、ちょっと蒼星石、少しだけ付き合つてくれる？話したいことがあるの。」

「え？ うん、いいけど」

「一人つきりで内緒話ですか……。翠星石も話が終わるまで待つてやる……、といいたいところですが、

具合が悪いから先に帰つてます。いいですか？ 蒼星石？」

「もちろんい。」

『気付く』べきだった。いや、このときすでに『気付いて』いたのかもしれない。

真紅の僕を見る『田』は、『友達』向けるものじゃないって。

「で、話つてなんなの？」

「貴方が気に食わないの」

「え？」

僕は、耳を疑つた。真紅の言つたことが、とつてて『理解』できなかつた。

「気に食わないって言つてるの。離母の友人と聞いて貴方にあつた時、貴方は控えめで、消極的で、地味で、NOといえない根暗ちゃんそれなのに最近妙に活発で、明るくて、積極的じゃない。自分から進んで私の前に立つこともあるわね。その上、素直に私の言つことを聞かないし。』

いつたい、真紅は何を言つてゐるんだろ。まったく、『意味』がわからない。

「私が貴方に近づいたのは、あくまで私の『引き立て役』、『下僕』として役に立ちそつたから近づいたの。

けつして『友人』なんかとして付き合つていたんじゃないのよ。其処の所、しつかりわきまえておきなさい。

そんな綺麗な服なんか着ちゃつて。貴方に似合ひのほど二色のセーターよ。

それから、最近ジユンと仲が良いそうね。どうこうつもり?ジユンは私の『下僕』の筆頭なのよ?

手を出さないで欲しいわね。まあ、貴方みたいな華のない野暮つたい女にジユンが振り向くとは思えないけど。

今、私の言ったことを、しつかり心に刻み付けておきなさい。

そういうと、真紅は席を立つて、帰つていつた。

今、なんて真紅は言つた?『友達』じゃない?そんなことがあるの?僕は『友達』だと信じていたのに。

『下僕』?『引き立て役』?そんな風に僕のことを思つていたのか。綺麗な服?僕はおしゃれしちゃいけないの?

ジユン君に手を出すな?それは『誤解』だよ。僕は『友人』としてジユン君が好きなんだ。

異性としての意識なんかこれっぽっちもないのに。『恋人』?確かに欲しいよ。けれど、それはジユン君じゃない。

華がない?僕と翠星石じゃそこまで違うのか。

ひどいよ、ひど過ぎるよ。

ああ、頭がぐわんぐわんする。やうだよ、きっと『夢』だよ。だって僕と『真紅』は『友達』だもん。

『友達』じゃないなんて、きっと冗談だよ。そう、信じよつとして、あの『眼差し』が冗談じゃないといつて、いたのを思い出す。どうしよう、どうしようか。翠星石に相談しようか。いや、翠星石

も、僕のことを『引き立て役』としか思ってなかつたりどうしよう。
どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう。

こうして、僕は人を無意識に『疑う』、つまり『信頼できない』と
いうことが、身近な人、『大切』な人にもりえることを学んだ。
結局、僕以外の人の心なんて、覗けないんだ。ああ、誰が何を考え
ているのか知りたい。

あそこでああいっていたら、ここでこうしていたら、どうなつてい
たか知りたい。

また一つ、望みが増えて。
こんなことを考えながら。

僕は背中に地平線から僅かに覗く、紫色の夕日を浴びながら家に向
かつて歩いていった。

1頁目 副題「始まつ」（後書き）

誤字脱字あつたらすみません

「ただいま」

翠星石の姿が見えない。たぶん晩御飯をつくりてゐるんだろう。
ああ、やはり不安がよぎる。このことを相談したものだらうか。
「おそかつたですね。何話してたですか？」

「なんでもないよ。」

「ふーん、あつやじこですねえー」

「はははは…」

「まあいいです。もうすぐできるから待つててください」

翠星石が鈍くて助かった。このときばかりは本当にやることに感謝したよ。

もし、もっと突っ込んで聞かれたらい、口を滑らせしちゃつたかもしない。

いや、薄々気づいているのかもしない。彼女は僕の『姉』だから。
『氣づかない振りをしてくれていいのだろう。おそらくは『親切』から。』

と、今までの僕なら、きっと考えていたに違いない。今の僕には、『どうでもいいから』何もたずねないようになにしか感じられなかつた。いや、考えられなかつた。そして、そんな自分が無性に悲しかつた。

「晩御飯、不味かつたですかね…？」

「え…？」

「蒼星石、ものすこく苦なうな顔してますよ

ちがうんだよ。君の作ってくれたものはすぐおいしかった。

ただ、苦い苦いどうつとしたものが、胸の辺りから体中を這いずり回つてゐるせいなんだ。

「いや、とってもおいしかったよ

「なりいこですけど…。」

駄目だ。こつもならじとも悪こいとをした気がするのに、今日はま

つたくしないや。

早く寝よう。明日になつたら何か変わるや。

そつ言い聞かせながら、いつもより数時間早く、僕は寝床に入った。

一昨日

その日は第一土曜で、学校は休みだった。

朝日が差し込んできても、昨日と何一つ変わっていなかつた。

いや、それどころか、ますます苦く、ますます嫌な臭いのものに変わつたようだ。

その日、僕は何も考えないように、丸一日寝ていた。

一日が、飛び去つていく。

布団の中で、本を読んだりして。明るい、それはもつ太陽よりもまぶしい、青春物ばかり選んで読んでいた。

今まで、敬遠していたのに。

まるで、美しい絵が印刷された薄っぺらい広告を眺めているようだつた。

階下で、翠星石と、『真紅』の笑い声が聞こえた、ような、気がした。

昨日

日曜日。今日も一日寝ていようと考えてたんだけど、翠星石が体に悪いと、無理やり起こしてしまつた。

『親切』で、僕の体のことを『心配』してくれての行動だ。もちろん。

けれどやはり、『嫌がらせ』にしか感じられない。本当に、人の心なんて脆く弱いものだ。

『絆』なんていうものは、その存在は確かに感じられている間は鋼鉄のワイヤーよりも、太く、頑丈に感じられるが、

その実、蜘蛛の糸よりも細く儂く切れやすい。しかも切れると、まるではじめからなかつたように振舞う。

その実、剥がれかかった皮のように、ジュクジュクと傷口は痛むのだ。本人に自覚がなくとも、間違いなく。

きっと、僕は今その糸をしりすしりすのつけで断ち始めているのかかもしれない。

心の隅から膿みはじめているようだ。

翠星石と一緒に家のにいるのが、生まれて始めて苦痛だった。だから僕は、翠星石が具合が悪そだからやめておけといつのを振り切つて、図書館まで歩いていった。

一歩じとこ、目が回るような気がする。まるで地球に僕が上にいることを拒否されているようだ。

ボーッとしていると、この星から放り出される。

そんな考えも浮かんだ。

図書館には、巴さんと雛莓がいた。

雛莓か。

近くまで歩いていき、声をかけてみようか。

近くまで歩いていくにはいった。

けれど僕は雛莓に声をかけようとして、ふと思いつどまつた。もし、僕が声をかけたら二人はどう感じるだろう。

二人で楽しく過ごしていた空間に僕が『割り込む』のだ。

巴さんは僕のことを他人としか思っていない可能性も十分にある。他人に声をかけられるのは不快だろう。

それに確かに、いやたぶん、雛莓と僕は『友人』だ。

しかし、『親友』ではない。雛莓にとつての『親友』は巴さんで、巴さんにとつての『親友』は雛莓なのだ。

どちらにとつても、僕は『一番目』より下でしかない。

僕は、踵を返して適当に本を選び、活字を追った。

けれど、まるで内容が頭に入らない。

そのときの僕は、ある一つの恐ろしい事実が鮮明に浮かび上がったことに、身を震わせていたのだから。

「僕には『親友がいない』、

認めたくない。けれど、認めざるを得なかつた。

きっと、誰に聞いても友人と聞いて真つ先に僕を思い浮かべる人は皆無なのだろう。

そして、ふと思つた。

僕が死んで、泣いてくれる人はいるんだろうか？

僕のことを、心から『心配』してくれる人はいるんだろうか？

僕のことを、『大切に』思つてくれている人はいるんだろうか？

僕は僕が『友人』だと感じている（少なくともそう思つていた）人たちすべてから疎まれ蔑まれ嫌がられているだけなのではないだろうか？

僕は、今ここに立つていていいのだろうか？

「蒼星石、何か変ですよ？どうしたんですか？」

家に帰ると、翠星石が尋ねてきた。

もちろん、毛頭答える気はない。答える気はしたが。

というより、そのとき、答えなければならなかつたのだ。

それでもやはり怖かつた。

一笑に付されるならまだいい。

真紅の言つとうりですよ。何自惚てるんですか？

なんて同意されたらたまらない。

そのことが、たまらなく怖い。

そんなことは無いはずだ。

けれど、不安とはありえない事への物のほうが大きく早く膨らんで

いくものだ。

「晩御飯はなに?」

「翠星石の腕によりをかけて作ったハヤシライスですよ

「また微妙な…」

「微妙さがたまんないんですう…」

ハヤシライスはおいしかったはずだ。けれど、なぜだらう。それは、もはやまったく味を感じることができなかつた。

「蒼星石、もう寝たですか?」

夜、翠星石が声をかけてきた。返事をしようか少しだけ迷つたけど、僕は寝たふりをすることに決めた。

なんだか、自分がどんどん嫌いになつてくる。

「あの時、真紅に、何か言われたんですね?」

一言一言ゆづくり確認するようにたずねてくる。

少しだけ、息が乱れた。

「……」

翠星石は、それだけ言つて、眠り始めた。やせつけ、翠星石は翠星石なんだろう。

深く『問い合わせずに』そつとじておいてくれる。

たとえめんどくさかつたからだとしても、とてもうれしかつた。

明日、学校で真紅と顔を合わせる。そのことに今、改めて気づいた。どうじよつ。また何か言われるんだろうか。いや、あれは真紅なりのジロークだつたのかもしれない。

明日、もう一度訊ねてみよう。

そんなことあるわけないのに。そんなことしないほうがいいの。たゞにいられなかつたんだ。

今朝。

朝一番に真紅にたずねようと思つていた。
あれは『冗談』だつたんだよね?
つて。

「おはよーなのー!」

「おはよーじざいます」

雑莓。巴さんもいる。

「おはよう。」

僕はそつなく、笑顔で挨拶を返した。

「どうしたの?なんだか元気ないのよー?」

「ううんだよ。どうしようかな。君は僕の『味方』かい?人の心ほど移ろいやすくわからないものはない。

もし今君が『味方』でも、午後にはどうだかわからない。

「昨日、図書館でもあまり元気がありませんでしたね。

声をかけようか迷つたんですが、あまりにも本に見入つているよう

だつたので、声はかけなかつたんですけど…」

「そうか、気づかれてたのか。まあ、どっちでもいいけど。

「そうだつたんだ。声かけてくれたらよかつたのに。」

努めて明るく返す。その実、僕はびくびくしていた。

なんでお前なんかに声をかけなければいけないんだ、といわれたらどうしようかと。

「そーなのー!でも、巴に言われて振り返つたらもひ帰つちゃつてたの…。残念だつたのー」

「へー…」

まづい。会話が続かない。

沈黙が針のように刺される。

逃げよう。

「『めん、僕先行くね。花の水遣り当番なんだ。』
「がんばってなのー！」

「本当に、蒼星石は花木が好きなのね」「違うの。蒼星石はうそをついてるの。図書館であったときから、なんだか様子がおかしかったの。」

「雛苺…？」

「それに…花の水遣りは、今田は翠星石のはずなの。やつぱり、蒼星石変なのよ」

「おはよう。」

とりあえず、カナリアに挨拶をした。常日頃親しく会話を交わしている人たちが怖い。

それでも、話をしないわけにはいかない。何か変だと思われてはいけないのだ。

カナリアとの会話も、やはり長くは続かなかった。

「おはよう

ん？この人は水銀燈…さんだつたかな？あんまり喋ったことないのに。

でも、そのおかげでかえつて話しやすい。罵られるとしても、それは『裏切られる』ことにはならないのだから。

「おはよう。水銀燈さん。」

「水銀燈でいいわ。」

「ありがとう。それで、水銀燈。どうして僕に話しかけたの？』

「本当に、わからない。しかも、このタイミングで。』

「べつに…なんとなくよ。それにしても、顔色悪いわねえ。どうしたの？ヤクルトでも飲む？』

「ありがとう。もううつよ。」

「はい、どうぞ」

ヤクルトなんて久しぶりだな。そう思いながら、僕は真紅を探した。けれど、来ていよいよだ。確かに、彼女がこんなに早く来るわけもない。

いつもギリギリに、真紅にあわせて通つっていたのを思い出した。

それから、一週間もたつていないのに、まるで何世紀も前の出来事のような気がした。

「乳酸菌は体にいいのよ。…本当に大丈夫なの？今にも倒れそうよ。」

「うん。大丈夫だよ。少し嫌なこと思い出しだけだから。」

「……真紅かしらあ？」

「えつ？」

「違うならいいんだけど。気をつけなさい。」

それだけ言つて、彼女は自分の席に戻つていた。

水銀燈も、何かあつたんだろうか。

それにしても、あんなに柔らかいしゃべり方をする人なのに、何で『真紅』と口にするときだけ竜巻のような嫌悪感に染まつっていたのだろうか。

いつか、聞いてみよう。彼女と僕は今は『他人』だ。嫌がられても、それほど怖くはない。

今度、話してみよう。なに、怖れる事はない。『友情』を感じ始める前に、もとどりの『他人』に戻ればいいだけさ。チャイムが鳴つた。時が走り去り、もう昼休み。

真紅に、聞かなければ。あの言葉の真意を。

そう思つたけど、翠星石やジュン君、ベジータや雛苺のいる前で話せるわけがない。

放課後だな。そう思いながら、机を寄せた。

「今日はお弁当は翠星石が作つてんですよ…どうです？うまそうで

しゃう?」

「わー、本当にうまいやうだな。少しぐれよ。」

「い、いいですけど…じゅ、ジユンのも少しほじこですか…」

「ん? いこよ」

「ほ、ホントですか?」

「こんなことで嘘ついてもしゃうがないだろ」

「ちょっとジユン。私のお弁当は?」

「…………ほら」

「早く出しなやこ。本当に、しゃうがない下僕ね」

「…………悪かつたな」

「雛苺、そのわくらんぼ、俺の苺と交換しないか?」

「いじのよーーヒナ、イチゴだーい好きなーー!」

「あ、するこですうーベジータ、翠星石も葡萄一粒やるからイチゴ

よこすです!」

「ああ、どうだ?」

今日は、カナリアは放送部の当番なのでいない。

一回、ボリューム最大で念仏を放課後までノンストップで流してから機械は触らせてもらえないらしいけど。

彼女らしい、といえばその通りだ。

けれど、僕はそんな失敗をしても、許してもらえることが「うらやましい」。

へこたれない」とが「うらやましい。嫌悪されない」とが「うらやましい。

逃げ出せない」とが「うらやましい。追に出せれない」とが「うらやましい。

明るく振舞える」とが「うらやましい。

「おー。どうしたんだ?弁当食べないのか?」

「もうだめ。早く食わないと昼休み終わっちゃうぞ」

いけない。お弁当食べるの忘れてた。

「ごめん、ちょっと眠くて。少しうといとしちやつた。」

「もしかして、俺の事を考えて眠れなかつたのか？それならさうといつてくれれば…」

「そんなわけないです！でも、昨日蒼星石は割と早く眠つてしませんでしたか？」

「うん。寝すぎるとかえつて眠くなつたりするでしょ？」

「そなうなら…まあいいですけど」

「もう大丈夫。お弁当、たべちゃうね。」

「ああ。ああ。ああ。僕は今何をした？」

「今まで、大切な『友人』だつたみんなに。」

舌の根が『真紅』に染まるような『嘘』をついた。

信じられない。僕がみんなに『嘘』を？

なんて事をしてしまつたんだろう。

お弁当を食べながら、ひたすら自己嫌悪の念に襲われる。

そして僕はすこしだけ、別のことを考えた。

水銀燈は今どこでお弁当を食べてるんだろう？

今度、誘つてみようかな？

放課後。

教室に真紅は、最後まで残つていた。

「蒼星石。何か話があるんでしょ？」

向こうから話しかけてくるなんて。少し予想外だ。

「う、うん。その、日曜に言つていたことは……冗談、だよね？

だって、ほら、お昼だって一緒に食べたし、それにほら、いまだつてわざわざ残つてくれたし…」

「…………」

「それに……そうだよ！なんていつたつて僕たち『友達』でしょ！」

？」

その言葉を、『必死に』、けれど『縋る様に』振り絞る。

真紅が口を開いた。聞きたくない。聞きたくない。聞きたくない。聞きたくない。

聞きたくない。聞きたくない。

耳をふさいで逃げ出したい気持ちを必死に抑える。

「あなた、まだ理解しない様ね。」

やはり、真紅の口から赤黒い呪詛が立ち上り始めた。

「この前も言つたでしょ。あなたはあくまで私を輝かせるための『アクセサリー』。

引き立て役なのよ。あなた、見たことない？美しい人がなんで？って思うようなブスを取り巻きにしてるのを。

あれは引き立て役として友人関係を結んでいるのよ。そうじやないのもごく僅かながらいるかもしれないけど、そんなものは所詮『偽り』よ。

どうせ長続きしないわ。人は、自分に似たものと群れ、自分より劣つたものに優越感を抱き、勝つたものには羨望と嫉妬の感情を抱くものなのだから。

なぜ、引き立て役が必要かわかる？美しい、醜い、かっこいい、かっこ悪い、高貴、下賤、大きい、小さいなんてものは、あくまで対比でしか決まらないの。

もし、この世がすべて等しい大きさのもので出来ているなら、大きさなんてないでしょ。働きありに高貴、下賤の区別なんてあるかしら？

すべての人の年齢が等しければ、老人も若者もないでしょ。なんにせよ、物事には比較する対象がいるの。

あなたは、私をより引き立てる。私が持つているものを一切持つてない。ただ劣っているだけじゃダメなの。

違いが際立つようなものでなければね。あなたはその点優秀だったのに。本当に残念だわ。

まあ、指輪にしろネックレスにしろ劣化はするものだからしじうが

ないといえばしょうがないわ。

ただ、それらと違つて人間の不便なところは、作り直しがきかないし、新しく気に入つたものがなかなかないことがあつたりするのよね。

それから、一緒にご飯を食べたから? そこも『人間』の不便なところね。ゆっくり捨てるか、なにか捨てる理由をつけないと去り際に傷を残していくのよね。

あなたなんかのせいで私の世評に傷がつくなんて耐えられるわけないじゃない。

残りかすに腐臭をつけられるのもたまんないのよね。本人だけ捨ててもその周りが食いついてくるのも、『人間』の不便なところね。あんまり取り巻きの多いやつをつっかり身につけると捨てるのに時間がかかるのよね。でも、あなたもともと『友達』多くないじゃない。

それ、全部『ゴミ』にしてあげるから。翠星石は時間がかかりそうね。まあ、厄介なのはそれぐらいかしら。

後は… そうそう、『わざわざ残つてくれた』だつたわね? 残るに決まつてるじゃない。

いつまでも勘違つたままなんて、反吐が出そなぐらつ不快だわ。まるで生ゴミと抱擁を交わす『気分ね』。

汚物と話をするのも不快だけど、それよりは遙かにましから。これでわかつてもらえた? もうしつこく絡み付いてこないでくれるとうれしいわね。

それじゃあ帰らせてもらつわ。』

「そんなのつてないじゃないか! 僕は、君の事を『親友』だと思つていたのに!」

「ええ。私もあなたのことを素晴らしい『アクセサリー』だと思つていたわ。

もとどうり、根暗で不気味で消極的でみすぼらしくて控えめで惨め

な蒼星石に戻るなら、また、『身に着けて』あげてもいいわよ。」
そういうて、真紅は帰つて行つた。なんだ。前言われた事よりさら
に酷いじやないか。

けれど、昔に戻ればまた『身に着けて』くれるつていつてたな。昔
に戻るか。今を捨てて。

どうしよう。どうしよう。戻りたくない。でも、あんな真紅にでも、
『裏切られ』たくはない。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。どうしよう。どうしよう。

そして今。

雛莓と会話を交わして、決まった。

昔に戻れば、雛莓たちも、『アクセサリー』が戻つてきたと、喜ん
でくれるかもしねれない。

けれど、僕は『疑つ』ことを知つてしまつた。もう、『昔』にはも
どれない。

元には戻れないんだ。

備考 翠星石とジュンの会話（前書き）

本編です。読み飛ばさないでくださいね。
ホント、お願いします。

備考 翠星石とジュンの会話

「…翠星石、今日一緒に帰らないか？」
「え、ええ？か、帰つてやらないこともないんですけど…」
「本當か？よかつた、じゃあ、放課後な」
「……やつたです！」

「なあ、翠星石。」

「な、なんですか？」

「今日の蒼星石、なんか変じやなかつたか？いつも口数は少ないほうだけど、なんだかどよんとしてたつていうか…」

「え？あ、ああ、そうでしたね。なんだか、昔に戻つてしまつたようなそんな感じがしましたね…。」

「昔？昔つて、蒼星石も引きこもりだつたのか？」

「ああ、ジュンは引きこもりだつたんでしたつけ。いや、そうじやないんです。」

「じゃあ、なんなんだよ？昔も今と同じいつも一〇一〇二〇三〇四〇といい奴だつたんじゃないのか？」

「そうでしたね。ジュンは、高校に入つてからの蒼星石しか知らなかつたんでしたね」

「どういう意味だよ」

「高校に入るまで、蒼星石はものすゞくネガティブだつたんですよ。」

「ん？でも、雛莓たちは、昔からいいやつだつたつていつてたぞ？」
「ひとあたりはよかつたんです。物腰も柔らかで。でも、そうですね、全身から悲壮感が漂つてるつていうか、翳つているつていうか。なんていうか、いつも影に立つてているような感じでしたね。例えば、『こんなことが何回もあつたんですよ』

“「蒼星石、どうしたんですか？」

「うん。また、ラブレターを渡されたんだ。」

「そ、そなんですか。」

「ずっと好きだった人なんだけどね。」

「よかつたじゃないですか！」

「ふふ、それがね、他のある女の子に、渡すか、こつそつ鞄がどこに入れといってくれつていうんだよ」

「それは……」

「この前のバレンタインデーも、クラス中の女子のチョコレー^トを配つて回つたんだよね……」

拳句の果てに僕が手作りチョコを渡そうとしたらそれ誰の？って訊かれちゃつてさあ……あればきつかつたなあ……

「そんなことがあつたんですか……」

「前も遊園地に男子誘つたら彼女連れてこられてさ……彼女いい人だつたんだけど、ライバル視すらされなくて……」

「そんな男には蒼星石はもつたいないです！」

「ねえ、翠星石。僕が中学校、いや、小学校も通して男子にかけられた第一声のほとんど占めてる言葉知つてる？」

「へ？いや、知らんんですけど」

「教えてほしい？」

「そりやまあここまで引っ張られたら氣になりますね」

「それはね……『ねえねえ、翠星石さんに、これ、渡しといってくれない？いやあ、なんだか直接渡すのは照れくさくて』

大体こんな感じだね。言い回しは多少変わること

ああ、あとはこの後に、君つて翠星石さんの双子の弟なんだよね？

とか、君はなんとなく女の子つて氣がしなくて、声かけやすかつたんだ。

とか、それにしても、女装癖のある弟がいるなんて知らなかつたな。とかがくつつくんだよね。」

「え、えっとお

「……部屋にいるからしづらいから入らないで。話しかけないでね……。」

ダダダダダダダダダダダダ
..

「……嘘だろ？」

実話なんですね。

普段は明るく見えるんですか 何か書きこかれてスイッチが入ると一時間ぐらいブツブツ何かつぶやき続けるんです。

しかも、いつてることが途中から支離滅裂になつていくんですよ。

それ以外
らダメだよ。

とか、どうしよう。あそこの女の子たちが笑ってるのは、きっと僕を笑ってるんだ。

とかよく言つてましたね。高校に入つてからはなくなりましたが。

卷之三

「……よか」だじやないか

喜んではかりもいられないんです。今まで臨界点を越えたら一気に吐き出していたものを、ずっと溜め込んでるんですもし、なにかで臨界点を超えて、なおかつそのまま溜め込んでい

たう…
きっと、蒼星石の心は溜め込んだ感情に引っ張られて、押しつぶ

されてしまひです。」

「…なんとかならないのか？」

「それができたらとっくにしてます！…大丈夫です。翠星石は変わりました。それに、とても賢い翠星石自慢の妹です。

一人で悩み続けるよつな馬鹿な真似はしませんよ。

「……そつか？」

「どうじつ意味ですか？」

「賢く見えるやつほどおろかだつてことだよ。じゃあ、また明日な
「このドヂメガネ！蒼星石に向かつて何を言つてるんですか！…
大丈夫に決まつてますよ。あたりまえですか。きっとそうです。
そうに決まつてます。蒼星石みたいに、やせしくて賢くてそれ
に、それに……一蒼星石が、酷い目にあつわけがないんです。
あんなにすばらしい妹の悩みなら、あつとこう間に解決するです
う。

わつとわつにきまつてます。わつとわつとわつとわつとわつと、
わつと……

備考 翠星石とジロンの会話（後書き）

…わざわざこなして作風ですね。
おつとめと自然にかけるよつこなつたいです。

…わざわざこなして、罵倒でもマイナス評価でもこなして、コメントへ
ださい。

わざわざ、またショックを受けるために行つた様なものだった。
結果はわかりきつていたのに、なんでもまた聞いたりしたんだろう。
『友達』か。なんなんだろう。仲がいいってなんなんだろう。真紅
は初めてできた『親友』だと思っていたんだけど。
やっぱり、『他人』を心の底から『信頼』するのは無理なのかな。
以心伝心なんてありえないんだ。つながつてているとしてもせいぜい
蜘蛛の糸程度。

結局は他人は他人にしかなり得ない。
あれ? どうしたんだろう。鞄がやけに重いな。顔を上げて歩くのが
つらい。

胃が思い。動悸がする。脈も速いな。頭痛もしてきた。
気のせいかな? 気のせいなんだろう。気のせいとは思えないぐらい
生々しい痛みだけれど。

ああ。歩くことすらめんどくさい。今すぐこの場にへたり込んで、
眠りほしきられたらどれだけ楽だろう。

トン

何かにぶつかつた。ボーッとしてたからだ。電柱かな? いや、電柱
ならもつと硬いはず。これはひょっとして、人?

恐る恐る顔を上げると、そこにはとても綺麗で、力強い、まさに人々の憧れの中の『女性』がいた。

「どうしたの? 相変わらず冴えない顔色ねえ。やっぱり真紅絡み
い?」

そのとおり。と、答えかけて躊躇つた。この人がそんなことをする
とは思えないが、真紅と手を組んで僕を轟る気でないという保証は
どこにもないのだ。

けれど、あのときの瞳に写つた憎悪は本物だったと思つ。『信用したものだらうか？

それに、返事をするのも億劫だつた。

「んん？私が信用出来ないみたいね。ところどは、やつぱり真紅に何かされるか、言われたみたいね。」

大丈夫な氣がする。たぶん、大丈夫だらう。おそらくだが、大丈夫なはずだ。

騙されても、まだ、『他人』なんだから、気にすることもない。

「取りあえず私の家に来るう？」

「うん。そうさせてもらつていい？」

「んつんー。質問に質問で答えるのはおばかさんだけよ。もちろんいいわよお」

そして、僕は水銀燈の家にお邪魔させてもらい、これまでの経緯を大体話した。

笑うなら笑つてくれ。たしかに僕が間抜けだつたのだらう。いつの間にか、けだるさは去り、僕は水銀燈相手に熱心に話していった。

水銀燈はとても聞き上手だつた。

「…なるほどね。そりや、人を信頼できなくなるわね。真紅は昔から、ずっとそうだつたのよ」

「え？やつぱり、中学校も一緒だつたの？」

「小学校も、中学校も一緒だつたわあ。仲がよかつたのは小学校までだつたけどね。」

「君も、真紅と仲がよかつたのか。」

「そうよお。最初は、本当の姉妹みたいに思えたわあ。

少しづがままだけど、思いやり深くて、友達思いの優しい人だと思つたわあ。

……初めはね。

私、重い病氣にかかつた従姉妹がいるの。いやいた、といつべきかしらあ。

「それって……」

「ええ。一年上で、とてもやさしくてね。

そりやもうドラえもんとのび太くんぐらいなかよかつたんだから。

…あ、私がドラえもんよ？

その子、めぐつていうのよ。めぐ、とっても歌がうまかつたんだけど、私が小学校に上がつて、すぐくらいに発病してね。

入院してゐる病院はそんなに遠くなかったんだけど、それでもやっぱり小学一年生にはちょっと危ない距離だつたわねえ。

やつぱり、親に一人でお見舞いに行くのは禁止ちゃつてね。それでもこつそり行つてたんだけど。

放課後毎日いそそどつかに消えて、誰ともろくに遊ばないんじや友達なんか出来やしないわよねえ。

めぐの事は大好きだつたけど、それでもやつぱりさみしかつたわあ。

そんなときに、真紅にあつたのよ。

いえ、この表現は少し違つわね。真紅に声をかけられた、つて言つほつがより正確かも。

あ、小学校の間はずつと一緒のクラスだつたの。

1学年2クラス、クラス替えも一年に一回しかない学校でね。

卒業するまでにほとんどのこの性格とか、特長とか、友人とか大体わかつちやうようなところなの。

今はどうか知らないけどね。

お見舞いに行き始めて一月ぐらいい立つたときだつたかしらねえ。

急いでめぐのお見舞いに行こうとしてたのよ、いつもどつづに。

ランドセルしようつて、教室を飛び出しけたときこ、金髪の女の子が話しかけてきたの。

なんで毎日毎日急いで帰るのかつて。はつきりいつて、めぐが重い

病気にかかってるなんて信じたくなかったのよね。

それで、その時めぐが入院してるからお見舞いに行つて行つちゃつたら、それを認めてしまうわけでしちゃう?

それが嫌で嫌でたまなかつたの。だから、"従姉妹のお姉ちゃんのところに遊びに行つての"としか言わなかつたのよ。

" うなの。わたしもそのひとにあつてみたいのだわ"

" だめよ。めぐにめいわくじやないの"

" そんなことないのだわ"

" とにかく、ダメなものはダメなの!"

私ももちろん来ないでつて何度もいつたんだけ、あの強情で、他人のことなんか気にしない奴を追い返せるわけもないじゃない。

結局病院までついてこられてね。

" めぐつて、びょうきなんかしら?"

""

" どうなの?"

" そうよ!おもたいびょうきなの!"

そういうつた後、おもにつきりわんわん泣いたわね、確か。

看護婦さんに患者と間違われてどこがいたいの?つとか聞かれたつけね。

" そうなの。いいわ。これから、わたしもおみまいこつしょにこいつてあげる。ちょうどいいわ。"

そのときはなんでそんなことしてくれるのか、何がちょうどいいのかぜんぜんわからなかつた。

いまならはつきりわかるけども。お見舞いに一緒に行く自分のこと

をやさしいいい子だとおもわせるためだつたんでしょうね。

それから、毎日一緒にめぐのところにお見舞いに行つてくれたわねえ。

めぐは、たぶん真紅の田的に氣づいてたんでしょうねけどわたしに友達が出来たつてそれはもうすごいで喜びよつだつたわ。

ほんとに、いつ発作がくるかわからないのに、あのはしづか様は…

10

わたしが風邪を引いたときはめぐが心配しないように言伝をしてくれたりもしたつけ。

そのとき、めぐからのお見舞いの品で、ヤクルトがあつて、乳酸菌は風邪の特効薬ですって入つてね。

わたしはすっかりそれを信じ込んで、3本立て続編みしたら本当に風邪が治っちゃったときは驚いたわねえ。

なかなか、めぐの病状はよくならなくて、小学校の間中ずっと通い続けたのよ。

その間、ずっと真紅は黙つてついてきてくれて。小学校6年生の、えーっと、秋の始まりかけたころだつたかしらね……。
お見舞いに行つたらめぐが病室から消えてるのよ。

その時、真紅がなんていつたと思ひ？

“ぐすり、ぬぐり——！——！”

せめて卒業式まで持ちなさいよ。役に立たないんだから”

あああああ！あああ……？ひっく、し、じんぐうう、い、い、いまなんて、て？”

“だから、新しいアクセサリーを探さないといつていいてるの。

重病に倒れた少女のお見舞いに毎日通う慈悲深い少女つて演出、なかなか気に入っていたのだけれど。死んでしまつたならしじうがないわね。

本当に。よくも今死ねたものよ。卒業式までが無理ならせめて冬休みまで持たせればいいのに。渡しの迷惑も考えてほしかつたわ。

“なに…いつてるんだかよくわかんないんだけど…”

“はあ……。めぐもめぐならあなたもあなたね。こうじつてるの。小道具が一つなくなつたわね。つて。”

“あなた…めぐを何だと思っていたの！？”

“私を心優しい少女に見せるためだけに生きていた死にぞこない。まあいいわ。なにしろ、哀れな水銀燈がいるんですもの。

従姉妹を失つた親友を慰める心優しき少女。なかなかいいと思わない？”

“…思うわけないでしょ…なんのよあんた…めぐが死んだのよ？…”

“それがどうかしたつていうの？第一、あなたこそ何様のつもりなの？そんな髪と目してて、誰のおかげで今までいじめにあわなかつたと思つているの？”

感謝されこそすれ、恨まれる覚えはないわね”

そういうつて去つていつたのよ。信じられる…？”

これはひどい。おそらく僕の受けた行為より何倍も。6年。水銀燈はそんなに長い間欺かれ続けていたのか。

「酷い…ね。でも、そんな目つて？」

「ああ。今はカラーコンタクト入れてるの。ですがに小学生でカラーコンタクトは親が許してくれなくて。ほら」

そういうつてコンタクトをはずしてくれた時は、鮮血を浴びたルビーのように妖しく輝いていた。

とても、とても綺麗だった。

「綺麗な目だね」

「そういうつてくれる人もいるけど、不気味だつて言つ人のが多いのよ。でも、ありがとう。

髪のほうは染めてみたこともあるんだけど酷くあれぢやつて。幸い今は脱色する人もいるからまあこまらないわあ。」

なんて明るくて、美しく、優しい人なんだろう。

時々瞳にほとばしる憎しみはまるで羅刹のようだけれど、その瞬間

でさえやはり美しい。

それに比べて僕は：

「なんだか、情けないことで落ち込んでたみたいだね、僕は。君の話を聞いたたら、へこんでちゃダメだったわかったよ。」

「何言つてるの。あなたは今まで『友情』に憧れ、何よりも大切なものとして想い描き、大切に抱いてきたんでしょう。十何年信じてきたものを崩されたんだから、ひょっとすると私以上の衝撃だったのかも。

わたしはもともと一人が好きなほうだったからあんまり真紅に裏切られたときも、確かにショックだつたけどあなたほどの衝撃は受けないと思つわあ。」

「でも、めぐさんが……」

「ああ、それなんだけど……」

「たつだいまー！あれー、水銀燈、誰かお客ー？ひょっとして彼氏！？」

「お帰りなさい、【めぐ】」

「え？……めぐさんってなくなられたんじや？」

「ああ、違うのよ。めぐ。蒼星石も真紅に騙されたつていうもんだから、小学生のときの話をしてあげてたのよ。」

「ああなるほど。もうこうじと。じゃ、わたくしから話してあげるわ。実はその2週間ぐらい前になんていつたかな、白黒に染め分けた頭をした、法外のお金をふんだくるお医者さんに手術してもらったのよ。

その年になるまで受けたくてもうけられなかつたから、3年ぐらい余分に入院してたかしら。

それでやつぱり手術後は絶対安静でしょ。一週間面会謝絶で、そのあと二日ぐらいへばつて返事もおぼつかないような状態だつたのよ。

まあその後の四日は退院とまでは行かないけどキャスターつていのかな?につかまつて歩き回れるぐらいには。

でも、水銀燈に心配されるのもなかなかいいもんだつたんで、まだ衰弱してゐ振りをしてたのよ。

で、その日私はアルプスの少女ハイジのクララみたいに水銀燈にいきなり元気になつて見せて感動を与えてあげよつと思つたわけよ。

そーすると、真紅が予想外の展開に走つて。まあ、その後水銀燈に会つた時きまづさつたらなかつたわね。

そのときの水銀燈は喜びのあまり吐くまで泣き続けて、最後は鎮静剤打つてもらつてたもんね。

あのときの水銀燈はかわいかつたわね。私にすがりながらめぐめぐうつて連呼して。

で、私はその後数ヶ月たつて退院して、今現在通う高校に近いからここに居候させてもらつてるわけ。

わかつた?」

「ちょっとお、ところどころ余計なことが入つてたわよお

「えー、はい。わかりました。で、その後真紅はどうなつたんです

か？」

「真紅はその後私が生きることがわかつたとたん、じわじわ水銀燈の悪いうわさを流して孤立させた後、徹底的に苛め抜いたらしいわね。」

「ええ。卒業するこには私と真紅が仲良かつたことなんて誰一人覚えてないくらい。もつとも、ただやられていただけじゃなくてもちろん私もやり返したけど。」

やつぱりこの人は強い。僕とは比べ物にならないくらい。そして、僕とは違つて輝きいている。華があるとでもいうんだろうか。

なんだか、僕と比べること自体おこがましい。真似したくても出来そうにない。

「あなたに、一つアドバイスをあげるわあ。」

「え、なんですか？」

「あなたは普段死ぬことを考えてる？」

「いえ、考えてません。」

「でも、いくら必死にがんばつていい大学に入らうと、世界的な発見をしようど、絶対にいつかは死ぬのよ？」

なら、常に考えていはずにはいられないはずじゃないの？」

「それは……」

「そう。無意識のうちに忘れようとしないから普段『死』を身近に感じないの。

それと一緒に。必ずいつか裏切られるものと想つて付き合つから『友達』と思えないのよ。

生きていると実感したければ、いつかは死ぬなんて考えていてはいけないの。

友達と思いたければ、いつか裏切られるかもなんてことば、忘れてしまいなさい。

むずかしいでしようけどねえ。」「

「……はい。」

確かに、そのことについて意識していってはいけない。裏切られるなんて考えたりしたらいけないことも。

けれど、やっぱり……

「怖いのよねえ。人を信じて打ち明けた後、なにもかも否定されてしまうのが。」

その通り。何でこの人は人の心が読めるんだろう? なにか、出来ないことはあるんだろうか?

「でも、あなた今私に打ち明けたつてことは、私を信じていなかつたつてことよね。」

それは一向に構わないわ。

でもね、蒼星石。

これだけは覚えておいて。

人は、自分が嫌っているものにだんだん似てくるものなのよ。自分が好きなものではなく、嫌いなものによ。

必ずね。遅かれ早かれ、人はそのことに気づいて自己嫌悪に陥るものなのよ。

あなた、裏切られるのが嫌いみたいね。

でも、今あなた自身がいままで『友人』だと『信頼』してきた人たちを裏切っているようなものよ。

まあ、真紅のことを包み隠さず打ち明けるのが必ずしも正しいとは言わないわ。

けれど、話さないのと話せないのはまた別物。

人は、自分が嫌っているものに似てくるものなのよ。

それが物であれ、性格であれ、特徴であれ、顔であれね。

これだけはよく覚えておいて。」

何を言っているんだろう。もちろん、話の内容が理解できないわけじゃない。

けれど、『理解』したくないんだ。

裏切られるのが怖くて、僕が先に『裏切つて』いた?
そんなことがあるはずがない。

けれど、翠星石や雛苺の信頼を先に断つたのは僕だ。
『理解』しなければいけないんだわ。

今なら、きつとまだ間に合ひ。

今から、一人に会いに行こう。

「…ありがとう。水銀燈、めぐさん。今から、僕がしらすしらす『裏切つて』いた、『友達』に会つてくるよ。」

「じゃあね」

「また遊びに来てね、蒼星石ちゃん。水銀燈も友達いないみたいだしさ。」

「はい。また、遊びに来させてもらいたいです。」

「……いつでもいらつしゃいねえ」

バタン。

まだ、何も変わっていない。

けれど、扉の音はとても軽やかに、星空の迫り来る、夕焼け空に響き渡つた。

「ねえ、水銀燈。」

「なに? めぐ。」

「嫌いなものに似てくるって、ひょっとして昔の自分?」

「…そうよ。中学のときの私は、真紅を嫌悪していながら真紅そのものだったわねえ」

「今は私そつくりのいい子だけだね。」

「よくいうわよ。…でも、ありがとう、めぐ。そういうつもりえると、とつてもうれしい わあ。」

「ふふふ。どういたしまして。」

僕は水銀燈の家を出ると、雛苺の家に向かって走り始めた。開き直りかけていた。どうせ、あと三年もしたらバラバラになるんだ。死ぬときはどうせ一人なんだ。

友人家族といつても所詮は他人。利用価値がなければ迷わず捨てるべきなんだ。

利用できそうな奴は骨まで囁るべきなんだ。

そう思い始めていた。

けれど、それじゃあまるつきり真紅と同じじゃないか。水銀燈に、会えてよかつた。

人は自分の嫌いなものに近づいていく。

それは、矛盾しているようだけど、事実なのだろう。彼女は、きっとあるときそのことに気づいたんだ。きっと昔の彼女は真紅のようだったのかもしれない。けれど、彼女は美しかった。やさしかった。まぶしかった。さあ、早く雛苺の元へ駆けていこう。

許してもらえないかもしれない。

けれど、それは僕が悪いんだ。

その時は、しつかりと謝つて、きちんと顔を上げて帰ろう。難しいだろう。けれど、それが必要なんだ。大事なんだ。しなくてはならないことなんだ。

叫びたいのを我慢して、僕は闇夜の中煌々と輝く彼女の家まで疾駆する。

家につくころは息も上がり、しばらく休まないと動くこともままならなかつた。

しばらく深呼吸をして、息も整つと意を決してインター^{ホン}に手を伸ばした。

ピンポーン

これまで聞いた中でもつとも無機質な音が響き、あたりの喧騒の中に沈みゆく。

「はーいー! どなたなのー?」

「僕…なんだ、けど雛^め…」

「あつ! 蒼星^{アキシ}石なの! トウモウ エー! 蒼星^{アキシ}石が来たのよー!」

ああ、まだ巴さんもいたのか。

少し、言い出しつく。

けれども、巴さんもいてもらつたほうがいいのだろう。

なんといっても、彼女は雛^めの『親友』なのだから。

「さ、蒼星石^{アキシ}石^シ上^アがつて上^アがつて…」

「あ、う、うん。お邪魔させてもら^うこます。」

「で、こんな時間にどうしたのー?」

「君に、いいたいことがあるんだ。」

「私、いないほうがいい?」

「いや、いてもらつてもかまわない。というより、いてもらつた方がいい気がするんだ。なぜかはうまくいえないけど。」

「そう。なら、ここに居るわね。」

「話つて? 最近何があつたかの話?」

やはり、雛^めはよく見ている。物事も、人も、その思いも、風景も。ただ、大事なところしか見ていないだけなんだ。

おそらく、雛^めは誰よりも敏感で、誰よりも鈍い。

「…うん。僕は、あることで『友達』が何かわからなくなつて、誰も信用できなくなつたんだ。」

いや、少し違うかな。『信頼』していた人たちが『信頼』出来なくなつたんだ。

例えば、君みたいにとても大切に思っていた友人が、突如として僕を嘲り始めるんじやないかって。

それがとても、とても怖くて、恐ろしくてしょうがなかつたんだ。だから、君が心配して声をかけてくれても、素直に打ち明けられなかつたんだ。

図書館でも、君達に声をかけようと思った。

でも、君達に拒絶されるのが怖くてそれが出来なかつたんだ！ごめん。裏切られるのが怖いだなんていつて、僕のほうから君達を裏切つてた。

本当に、ごめんなさい…

「…なんで、急に私達に、いえ、雑莓に話してくれる気になつたの？」

「水銀燈に、教えてもらつたんだ。

人は自分が嫌つているものに近づいていくんだつて。そのどうりだつたよ。

僕は君達に裏切られたくないばかりに、僕が君達を裏切つていた。

「水銀燈つてあの水銀燈？銀色の髪の？」

「蒼星石、あんまり喋つた事なさそうなのよー？」

「…うん。でも、水銀燈も同じような目にあつたことがあるらしくつて。

それで、そのときの自分と僕が似た雰囲気だつたから声をかけてくれたみたい。

「…やつぱり、あの時真紅に何か言われたのね？」

「やつぱり、雑莓は賢い。それを誇示しないだけだ。

「…うん。僕は友達じゃなくつてアクセサリーだつたんだつて。

驚いたよ。そんなことをいきなり言われたこともだけど、その一言で何も信じられなくなるなんて。

やつぱり、入つて脆いもんだね。心も、体も。ちよつとしたことで壊れてしまつ。

水銀燈も、小学校のころ、真紅に同じような、いや、僕より酷い目

にあつてるそうだよ。

いまさら許してもらえないかもしれないけど、それでも、謝りたくて…

「うぬ。確かに許したくない。

悔しいのよ。雛と蒼星石の小学校のころからの『友情』は、真紅の一言で揺らぐようなものだつたなんて。

…けど、それでもやつぱり、蒼星石はヒナの大事な大事な友達なよ…」

「ありがとう…ありがとう…ありがとう…」

嬉しい。涙が零れそうなくらい。

友情とは、たとえ蜘蛛の糸ほどの大さしかなくても、それはものすごく丈夫なんだろう。

少なくとも雛と僕のものは、疑わない限り。

魔法や、夢と一緒に信じなければ消えてなくなる。もう一度と僕は、この絆を断つたりはしない。

失いたくない。この大事な『友人』を。

「ねえ。蒼星石。一つだけ、聞かせてもらつてもいい？ 私と雛が一緒に居ると、いつもあなた避けてるわよね。どうして？」

「それは…」

避けてる？僕が巴さんを？

そんなことがあるかな？

確かに避けてたかも。

なんでだろう。

いや、無意識のうちに避けていたとしたら答えは決まつている。それは、きっと…

「そうしたほうがいい気がして。

なんだか一人で話してると僕が居ると邪魔な気がして…。

なんていうか、割り込んじゃいけないようなきがしたんだ。」

「…そんなことないわよ。だって、あなたも大事な私達の『友人』だもの。ね？」

巴さんが友達だと思つてくれていたなんて。

僕の一方的な感覚だと思っていたのに。

迷惑がられているだろう、疎まれているんだろうと、そう信じ込んでいたのに。

「…………うん。巴さん。ありがとう。」

「巴でいいよ。」

「ありがとう。巴。それじゃ、離婚、翠星石にも早く会いたいから、

そろそろ帰るね。」

「うん。あ、明日は巴もお昼一緒に食べられそうなのー！」

「え、そうなの?じゃあ、明日はお弁当豪華にしなきや。」

…そうだ。明日、もう一人誘つていいかな?」

「水銀燈なの?もちろんなのよーー!」

「じゃあね!」

さあ、これで疑心暗鬼も治つたようだ。

家に帰つたら、一番疑つてしまい、一番心配をかけた、一番大事で、

一番親しい翠星石に、必死で謝ろう。

たとえ許してくれなくとも、許してくれるまで謝り続けよう。

大丈夫。きっと、笑つて許してもらえる。

なんてつたつて、翠星石だもん。

僕は、夜空の星に翠星石を描きながら、家路をたどつた。

家は、いつもとかわらざじか寂しげに佇んでいた。

いつもはなんとも思わないのに、今田は家が無性に嫌かしい。勢いよく、扉を開けた。

「遅いですよ、蒼星石ー。」こんな時間までいつたじまひまつ歩こてたんですかー。

ほら、ご飯できてますから早く一緒に食べるですうー。」

いつもと全く変わらない、いや、ずっと昔からかわらない蒼星石。なぜ、僕は翠星石を疑つたりしたんだろう。

こんなにも、彼女は優しいの。

「ほら、早く中に入りやがるですうー。そんなとこにボーッとつたつてたら風邪引きますよ?」

「そうだね。ご飯、今日は何?」

「お、お手軽にカレーです。べ、別に手抜きしたわけじゃありませんからね。」

「うん。おいしそうだね。」

「そういうともらえると嬉しいですね。で、早く食べるです。」

「…でも、その前に話があるんだ」

今、話をしなければ、僕はきっと一度とそのきっかけをつかめない。今まで、それ以外のことでも、それで何度も悔やんだか。今回だけは、きちんと話をしなければならない。

翠星石にだけは、嫌われたくない。

なにしろ、僕の大事な大事な…

「…やつと、話してくれる気になつたんですか

「え?」

「私は鈍いほうですが、さすがに十何年も一緒に暮らした妹の様子がおかしいことぐらいいわかりますよ。」

何度も詰めようと思つたかわかりませんけど、問い合わせても話しありますよ。

てくれそうにありませんでしたから、話してくれるのをまってたんですよ。
……なにが、あつたんですか？』

翠星石にまで、気づかれていたのか。

自分では、感情を押し殺すのはつましいと思つていたんだけれど。
さて、どこから話そつか。

翠星石のことだ、全部話したら真紅の家まで殴りこみに行きかねない。

はは、嬉しいな。翠星石が僕の『心配』をしてくれると、『確信』ができる。

昨日までなら、きっと僕のことなんかで殴りこみに行つてくれる等
考えられなかつたろう。

人に『心配』させるのは、いけないことだ。

おそらく、その人を悲しませ、泣かせるのと同じぐらい。
けれども、『心配』してくれる人がいるといつのは、なんと嬉しい
ことなんだろう。

「蒼星石、何を考え込んでるんですか？」

「大丈夫、何を聞いても驚きませんよ。」

「……真紅に、あの時何か言われたんですね？」

翠星石にまで感づかれてたか。

一番、僕が鈍いみたいだ。

話そう。包み隠さずに。

最初から最後まで。

翠星石は僕を『信頼』してくれている。

それにたいして多少とはいへ『嘘』を混ぜたことを話すのは、

翠星石の『信頼』を『裏切る』ことだ。

「……それはもう、一度としてはいけない。
さあ、話し始めよう。

もう一度、思い返して。

「そりゃつらっても、事細かに思い出すんだ。

翠星石にせ、きちんと伝えなければいけない。
あとと誰よりも、心配してくれたはずだから。

「そりだつたんですか…。真紅がそんなことを…」

「うん。僕もいまだに夢見たいな気がしてるんだよ。
本当に、夢ならいいのに。」

「そんなことがあつたんなら、早く話して欲しかつたですー。」

「じめん。でも、誰も信用できなくなつてたんだ。離母も、翠星石
でさえも。

自分でも嫌気がさすほど疑り深くなつてね。
世界が真つ暗にみえたんだ。

それで、どうしても話す気になれなかつたんだ。」

「……ひょつとして、話す気になつたのは、水銀燈と関係がある
んですか？」

「え？ う、うん、そうだけど、なんでわかつたの？」

「前に何回か話したときに、真紅と付き合つのはやめとけつて言わ
れたんです。ろくでもない奴だからつて。

その時はふざけたことをいつてるいけ好かない野郎だと思つてたん
ですが、

「どうやら正しかつたみたいですね…」

「そんなことがあつたんだ。でも、そう思つたのも無理はないよ。
真紅はなんだかんだでいい人だつたもん。」

「ちがいますよ。いい人の振りをしてただけですう。」

「そう、だつたね…」

「水銀燈には、ひどいことを言つてしまつたですう。
明日、謝るです。」

「それがいいよ。」

「蒼星石。一つだけ約束して欲しいです。

これから、もう一度ないと 思いますが、こんなことが会つたらすぐ話して欲しいです。」

「…………うん。約束するよ。」

「…………一つだけ言っておくですう。蒼星石は、翠星石の誰よりも大事な妹です。

何があつても、蒼星石を裏切りはしないですう。

絶対に、絶対に、ぜえーつたににです。

大切な大切な蒼星石、姉自慢の蒼星石なんですから。世界で一番かわいくて優秀な蒼星石なんですよ？もつと、自分に自信を持つても構わないですよ。さ、ためる前にカレーを食べるですつ！」

そういうて、スタスタと歩いていった。照れてるんだろう。

僕は絶対にもう、翠星石を疑つたりはしない。何があつても。

今までの自分が恥ずかしい。

こんなにも大切に思つてくれているのに。

もつー一度と、翠星石の『信頼』を『裏切り』はしない。

「…おねえちゃん。ありがとう。」

「ど、どうしたんですかいきなり。は、早くカレーをたべるです。早くするですう！」

大好きで大好きで大好きな、僕の、大事な大事な大事な、おねえちゃん。

「今日、一緒に寝ない？おねえちゃん。」

「ほ、本当にどうしたんですか？」

「いいですよ。

と、とにかくカレーを食べるですッ！」

カレーは、とってもおいしかった。

「翠星石の布団でいい?」

「いいですよ。」

「ふふ。久しぶりだね。」「うして寝るの。」

「小学校以来ですかね。」

「そうだね。」

「…大きくなつたですね、蒼星石」

「翠s、おねえちゃんもね」

「ほ、ほ、本当にどうしたんですか?」

「たまにはいいじゃない。照れてるの?」

「ま、まさか。ほり、早くねるですよ。」

「……うん。おやすみ、おねえちゃん。」

「あ、おやすみなさいですか。」

その後、翠星石は子守唄を歌つてくれた。

小さいうるよく歌つてくれた子守唄。

それにはあわせてトントンと背中をたたいてくれた。

：明日も、じうじて寝ようかな。

そんなことを考えてみると、あつとこつ間に僕は夢の中に沈んでいった。

本当に、わずかな時間しか感じていられなかつたけど、翠星石の体はとても温かかった。

夢のなかは、翠星石のぬくもりとやわしさで、満ち溢れていた。

それほどでも懐かしい匂いのする、快い夢だった。

次の日、学校に行くとなんだかみんなの視線が冷たい。
まあ、予想はしていたことだけど。

きっと昨日までの僕なら、これだけでへこみまくっていただろう。
けれども、僕には『信頼』できる『友人』がいる。
なに、へこむ必要はない。こいつらは、僕が素晴らしい『友人』を
持っていることに、嫉妬しているだけなんだから。

どうせ真紅がくだらない噂を流したんだろう。

噂を真に受けた奴にろくなやつはない。

もちろん、流す奴にも。

僕は一回り『成長』した。

タフで強く、美しく。

ナルシストは嫌われる。けれど、根暗はそれ以上に嫌われる。
多少、ナルシスト気味のがいいんだ。

僕はその日、俯くことなく昼休みまで過ごした。
たとえまわりから、罵られようとも。

昼休み。

水銀燈を誘つてみた。

驚いた顔をしていたけれど、笑顔になつて一緒に来てくれた。
今日は巴も来ている。

巴さんより、巴つていう呼び名が呼びやすいな、やつぱり。

今度一緒に遊びにいってみよう。

「みんな、水銀燈も来たよ。」

「こんなちわ。私は巴よ。」

「雑誌なのーー！」

「わ、私はす、す、翠星石です。その、よろしくです…

「私は水銀燈よお。」

ふふ。珍しい。久しぶりに翠星石の人見知りが出ている。

翠星石も、僕が最初そうだったように、水銀燈に見とれているようだ。

ちょっと大人びた、その柔らかな物腰は、誰でも憧れるだろう。

その時、もう来るとは思わなかつた二人が机を寄せた。

「べ、ベジータです！ よろしく！」

彼はいい人だ、けれど今は華麗にスルーだ。

「……桜田ジユン。知つてるよな？」

「ええ。……むかしツから真紅と一緒に居たもんねえ。

「ジユ、ジユン！ いまさら何をしに来たんですか！」

「弁当を食べに。」

「真紅が、真紅が蒼星石に何をしたのか、わかつてゐるんですか！？」

「……まだ、始まつてすらいないよ。」

そのとつり。

「そのとつりよお。それに、ジユンは真紅の『下僕』、つまり『召使』であつて、『取り巻き』じゃあない。」

「何いつてるのかよくわからぬのー。」

「こき使われるだけの存在つてことだよ。真紅の奴にな。」

こういつたとき、ジユン君の顔にはわずかに笑いが浮かんでいた。僕は、その笑いをよく知つている。

自分を諦め、嘲笑う笑みだ。

「今日は、追い返さないでおこつ。」

彼は少なくとも、嫌な奴ではなさそうだ。

「さあ、みんな、早くご飯食べよつよ。昼休み終わつたやつよ。」

「やうねえ。食べましょつか。」

さて、真紅がおそらしくけしかけたであつて、じめは、実にしょぼい。

上靴隠しに始まり、席に画鋲を置く、無視をする、などだ。
ぬるい。実にぬるい。

幼稚園から中学校まで、いじめられ続けた超根暗だった僕にこの程度のいじめは通じない。

無視などいじめに入らない。上履きだつていつも予備を用意している。

画鋲なんざ払えбаい事。教科書は破られてもさして困らない。
もうすでにすべて勉強したから。それに、年度初めにすべてノート
をとつておいた。

それでも、僕はある程度困つた振りをすることにした。
いじめというのは相手が平氣そつであればあるほど、エスカレート
していく。

破かれた教科書を見つめながら酷いよ…。とでも咳いて、涙を少し
こぼしておけば、大体それ以上の虐めには発展しない。

何日か学校を休んでみてもいいだろう。

ただし、あくまで相手の加虐嗜好に触れない様に、注意しなければ
いけないけれど。

そう。

たつた、それだけのことのはずだつた。

いつもどうり、適当に流しておけばいいだけの事。

そのはず『だつた』。

いつか、真紅は言つていた。

“でも、あなたもともと『友達』多くないじゃない。それ、全部『
ゴミ』にしてあげるから。”

まさか、それは無いだろうと。

高をくくつていた僕が間違つていた。

翠星石の学校からの帰りが、遅い日があつた。
なにか、落ち込んでいる。

「翠星石、どうしたの？」

「……なんでもない……」ともないです。」「

「何かあつたの？」

「……蒼星石の、友達だからって、いじめられたです。」「

「ええ？？」「

「たいしたことじやないんですけど……。ペットボトルを2、3人の男女に投げつけられたんですね……。」

翠星石は、今まで虐められたことがない。はずだ。そのショックは大きいだろう。

ひょっとすると、雛莓や巴、ベジータ、さらには水銀燈まで、何かされているかもしねりない。

とめなければ。

やめさせなければ。

僕一人なら別に何をされてもかまわない。笑って、へらへらしていればいいだけのこと。

ただ、友達にまで手を出すのはやりますがだ。

絶対に許せない。

どうすればいいだろう。

なんとか、なるだろうか？

幸い、雛莓も巴も翠星石も、女子の友達は多い。

水銀燈も男子に人氣があるし、ベジータもそうだ。

それらが真紅に全員寝返るとは思えない。

彼らは、それなりに人脈もそこそこ、人望も結構ある。なんとか、なるだろう。

と、いうよりも、いじめに加わっているほとんどは真紅になんとなく煽られているだけなんじやないか？

真紅にそれほど人氣、カリスマ性があるとは思えない。

みんなをちょっと落ち着かせたら、あつといつ間にこのいじめは消えてなくなるんじやないだろうか？

そんな気がする。

真紅、真紅、真紅。

僕はなんだか君が哀れになつてきたよ。

人はいつまでも押さえつけられてはいらないんだ。

君はおそらく、自分で思つてはいるほど人望は無いんだよ。

小学校の延長でここまで来てしまつたのだろうね。

けれど、他の人もすべて、小学校の延長でここまで来ているわけじゃないんだよ。

すべての人間が自分の前に平伏している様に見えるんだろうね。

逆らうものはすべて潰せる様に見えてはいるんだろうね。

真紅、真紅、真紅。

それは、とても大きな間違いだ。

僕が、そのことを気づかせてあげよう。

君は誰の上にも立つていないと。

案外、僕らに関する噂は嘘だと説得したらみんなこつち側に簡単に寝返つた。

どうも真紅の言つてはいることは、完璧なのだけれど信用性に欠け、嘘臭かつたそうだ。

それに、みんな僕たちがそんなことをするわけないと、信じてもくれた。

やはり、人望というのは大事だ。

結局、いじめは一ヶ月と続かず、僕達は学校生活を楽しんでいる。

真紅、僕は君のおかげで大切なことに気付けた。

友達を裏切つてはならない、疑つてはならないことに。

そのことでは感謝しているよ。

けれど、君はどうなんだい？

このことで何か気付けたかい？

真紅、君は、自分をはつきり理解しているかい？

世界は君の望む色に染まりはしないんだよ。

世界はいつまでも同じではないんだよ。

君はもう、女王ではないんだよ。

酷な様だけれど、事実なんだよ。

逃げれやしないよ。君はこの世界に生きているんだから。さあ、目を開けて」」らん。

真紅、真紅、真紅。

確かに君は嫌な奴だよ。けれど僕は、君が哀れでならない。

君は泣いたことがあるのかい？

君に友人はいるのかい？

君の思いを受け止めてくれる人はいるのかい？

君は嫌悪に満ちた賞賛がほしいのかい？

君へ憎悪と驚嘆の眼差しを向けるべきなのかい？

真紅、真紅、真紅。

僕は君が、

「おかしいのだわ。なんで、蒼星石たちを潰せないの？やり方は完璧なのに…。」

「…真紅」

「別の手段に切り替えるべきかしら。」この方法をもうじばりく続けたほうがいいのかしら。」

「真紅。」

「そうそう、新しいアクセサリーも探さなくっちゃね。全く、こん

なに早くだめになるなんて思っても見なかつたわ。」

「真紅！」

「…何？やかましいわよジユン。」

「……もう、うんざりだ。もう、嫌になつたよ。」

「いつたい何を言つてゐるの？」

「真紅。僕は君がしてきたことを小さい頃から見てきた。

それもすぐそば、君の側でだ。けれど、片棒を担いだことは無い。それでも、お前の近くに居続けた。

何故かわかるか？いや、わからないんだるうな。」

「…口の利き方がなつてないわね。」zy

「うるさい！僕は、お前のそばになんか居たくなつた！

けれど、僕がそばに居て、何とかお前を抑えられるかも知れないと思つたんだ！

いや、違うな。何とかお前を制止しなければいけないと感じたんだ。僕の初恋の人を、不登校に追いやるのを目の当たりにした時に！アクセサリー？すべての人間に嫌われてまでやさしい、うつくしい、賢いなんていわれたいのか？

確かに、傍に居て何回かお前の行動をとめることもできた…けど、けどもううんざりだ！

お前は一向に成長しない！一向に『人』を『人』と認めない！

：もう、僕は疲れたよ。一度と会いたくない。」

「何を言つてゐるの？あなたは私の下僕なのよ？
勝手なことを言わぬで頂戴。」

「勝手なのはお前だろー！誰が下僕だ！家が近くて気弱だつた僕を、勝手に自分の召使に仕立て上げたのは！

何度も何度も言わせるな！もううんざりなんだよ。僕には、お前のそばにいたせいで少ないけどベジータ達、友達がいる。けど、お前は違うんじゃないか？

俺は、もうお前のそばに居たくない。

孤独の味をしつかりと噛み締めてみる。」

「いつまでも私に協力し続けてくれる、従順な下僕、それがあなたなのよ！」

なんなら、特別に私の恋人に格上げしてあげてもいいわ！」

「……確かに、一時期お前に恋心を抱いていたこともあつたよ。けれど、今となつては昔の話だ。」

すぐそばでお前を眺め続けたら、百年の恋も冷めちまう。

それには、誰が召使の延長線上にある、恋人になんかなりたがる？

もう一度だけ言うよ。

もううんざりなんだ！下僕？召使？

僕は人だ！それも男だ！

お前は一人で永遠に、孤独を噛み締めながら！

永久に手に入ることの無い『絆』に思いをめぐらし、それがどんなものか考え続けてろ！

僕、いや、俺はもう、お前の元には戻らない。」

「一つだけ訊くわ。なぜ、今それを言うの？」

「もう、誰もお前に騙されないとわかつたからさ。

俺があ前を止める必要が無くなつた。
だからさ。

これで、すべては終わりだ。

二度と話しかけるな。反吐が出る。」

「ま、まつて！」

振り返らずに、ジュンは去つていく。

「何を、どこで、間違えたのかしら……？」

ひょつとして、最初から……？

それはないわ。絶対にありえない……。

けれど、ジュンは惜しかつたわね……。

久しぶりに、涙がこぼれそうなのだわ……。」

哀れでならない。

そして、じばらぐして。

真紅は、外国へと留学していった。
たまたまか、それとも今回のことのせいかはさっぱりわからない。
けれど、わからないほうがいいんだろう。
ジュン君やベジータ達は相変わらずいい友達だ。若干変わったことは、ジュン君がベジータに似てきたことぐらい。
水銀燈も、すっかり僕達の中に溶け込んだ。めぐさんとも時々遊んだりする。

翠星石と、めぐさんはものすくへ気が合つよつた。似たもの同士なのだろう。

一人して、僕や水銀燈をからかつてくる。
それでも、けして嫌がらせはしない。
まあ、当たり前か。

そして今。

僕達は林間学校に来ている。
もう夜中も近い。

みんな、布団にもぐりこみ、コショコショ内緒話に忙しい。
「ねえ、こうして先生たちの目を盗んでこいつぞり喋つたり、遊ぶの
つて学生生活の醍醐味じゃない？」

高校を出たら、もつ先生達はいないんだし。学年全体での泊り込みの合宿も無いよ。

樂しげよね、こうつの。あと数回しかないなんて残念だよ。」

「そうかもねえ。大学生になつたら、こんなわくわくもなくなるも

の。やつぱり、先生の監視つてマークを盛り上げるわ。

「つるせえですよ、一人とも。懐中電灯持つてきたんて、トランプ

でもやりませんか？」

「いいわよ。」

「…うん。 そうだね！」

「蒼星石、声がでかいですよ」

時々、くだらない思いが起きる。

そして、それはいつも不安へとつながる。

いつまでこのままでいられるのだろうかといつ。

それは、そのときが楽しければ楽しいほど湧き上がりやすい。

けれど。

けれどだ。

先のことしか考えられず、今をないがしりにするのは。

今を捨てることだ。そしてそれは、生きていくうえで一番やつてはいけないことだ。

そうとも。

思いつきり、今を楽しまなきや。

大切な、『友人』達と。

友情というのは、何物にも変えがたい。

孤独を埋めてくれる、甘露の雨。

思い出の中に燐然と輝く一粒の宝石。

絶対に、捨ててはいけない。

絶対に、裏切ってはいけない。

そして、なによりも。

決して、友達を。

忘れてはならない。

時という砂の中に。

埋もれさせてはならない。

最後まで読んでくれた方、ありがとうございます。

ちなみに、話数を重ねる」とこクオリティが下がってるのは仕様です。

いつそう精進を重ねるので、時々チェックしてください。

雨男の死神を今後ともどうかごひいきに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5718c/>

『友情』についての考察

2010年10月10日14時10分発行